

出版社 2025F 社の概要と感想

同志社大学 社会学部 社会学科
藤本研究室
榊 千晴

2025F 社は、編集作業において二度手間になってしまうという点から、基本的に全て人の手で作業し、AI は導入していなかった。AI を使った調べ物も裏取りをしなければならず、結果編集者本人が調べることが多い。このように信頼性の点で現段階では導入の兆しはない。本を出版する中で、編集者が構成などを考え、依頼していくことがメインになるものの、相手からの持ち込み原稿も 3 割程度存在する。出版物の構成比は、大学向けの教科書が 8 割で、紙ベースでの出版が軸となっている。一方で、電子書籍のようなニーズがないわけではなく、そこに対してどのようにしたら良いのかについてはまだ模索段階である。現在では、PDF をそのまま電子版にしたような形のものがほとんどである。そこに動画や音声などの要素を付け加えるなどの動きを行うのが理想的なのかもしれない。紙の本と電子書籍をセットで売るといったことを一部の教科書でやっただけのもの、大学自体としてその電子書籍をもっとやろうという動きがまだそこまでないような状況のため、電子書籍中心でいくのは行きにくい部分がある。

企画がきまり、作業を進めていく中で編集者と著者との間では、基本的にメールを媒介として連絡を取っている。編集者が本の企画を立て、著者に執筆をお願いしに行く際には可能な限り対面で会えるようにしつつ、時間や場所の都合でオンラインによるミーティングになる場合もある。編集者にはよるものの、これまでの付き合いや前の編集者からの繋がりというのが大きいネットワークになる。他には、独自に開拓していくこともある。こんな本を書いてもらいたいというアプローチから始まり、うまく話がつけばそこから広がっていく。その一つの例として、学会も良い機会となる。また、著者からの紹介というのもあり、そこから少しずつ広げていく編集者もいる。多くの大学の理工系の学部など、大学とのつながりは深く、教科書をメインで出版しているため、先生方に直接売り込みに行くこともあり、大学の先生とのつながりは非常に重要である。新人社員の育成として、業務内容や社会人としての心構えなどの最初の研修後は補助の形で編集の作業でゲラの校正を手伝うような仕事を行う。もう一つは、出版社の業界団体の合同の研修会に参加して、業界内の現状などを教えてもらうことがあり、これは新入社員だけではなく、入社した社員が全員 1 回は参加するようになっている。時々、業界団体のテーマを決めて勉強会があるため、テーマ次第ではそこに参加することもある。

AI を導入する可能性のある作業領域として、用語の統一チェックや図の作成があるが、現時点ではまだ AI にそこまでの能力は見込めない。AI で作図するとしても、思っていたものと違うものが出てくることがあり、最初から自分で作成したり、外部のイラストレーターに依頼したりする方が多い。そのため、ある程度イラストレーターを抱えており、印刷所で簡単にトレースし作図してもらう。また自分でやった方が早い時は編集者本人が作る場合もある。このように著者だけでなくさまざまな人とのつながりのある編集者に求められるスキルの一つとして、コミュニケーション能力が挙げられる。知らない人にもアプローチをする機会があるため、人とうまく話すことは必要不可欠である。出版業界として本離れがささやかれている昨今、根本的な解決策を考えていくことが必要である。

お話を伺う中で、AI は人の生活や仕事をしやすくするためのものではありません、2025F 社のように、二度手間になってしまうという点で導入に踏み切ることが出来ない企業もあることが分かった。AI を効果的に活用し、時代の流れに沿いながら働き方を変えている企業もある中で、出版社のように、業界によっては活用が難しく、他の業界と AI 活用という点で差異がでてしまうため、どの企業も、現代においてどのような改革が必要なのかを考えていかなければいけないのではないかと感じた。これからの社会で、AI を使う企業、使わない企業で必要以上に差が出てきてしまうのではないかと思う。AI に詳しく、使いこなせる人材がいない会社では、すぐに導入には踏み込めないだろう。それが予想される中で、特定の企業の独占状態にならないようにする必要があると感じる。



***イメージイラストはAIで生成**